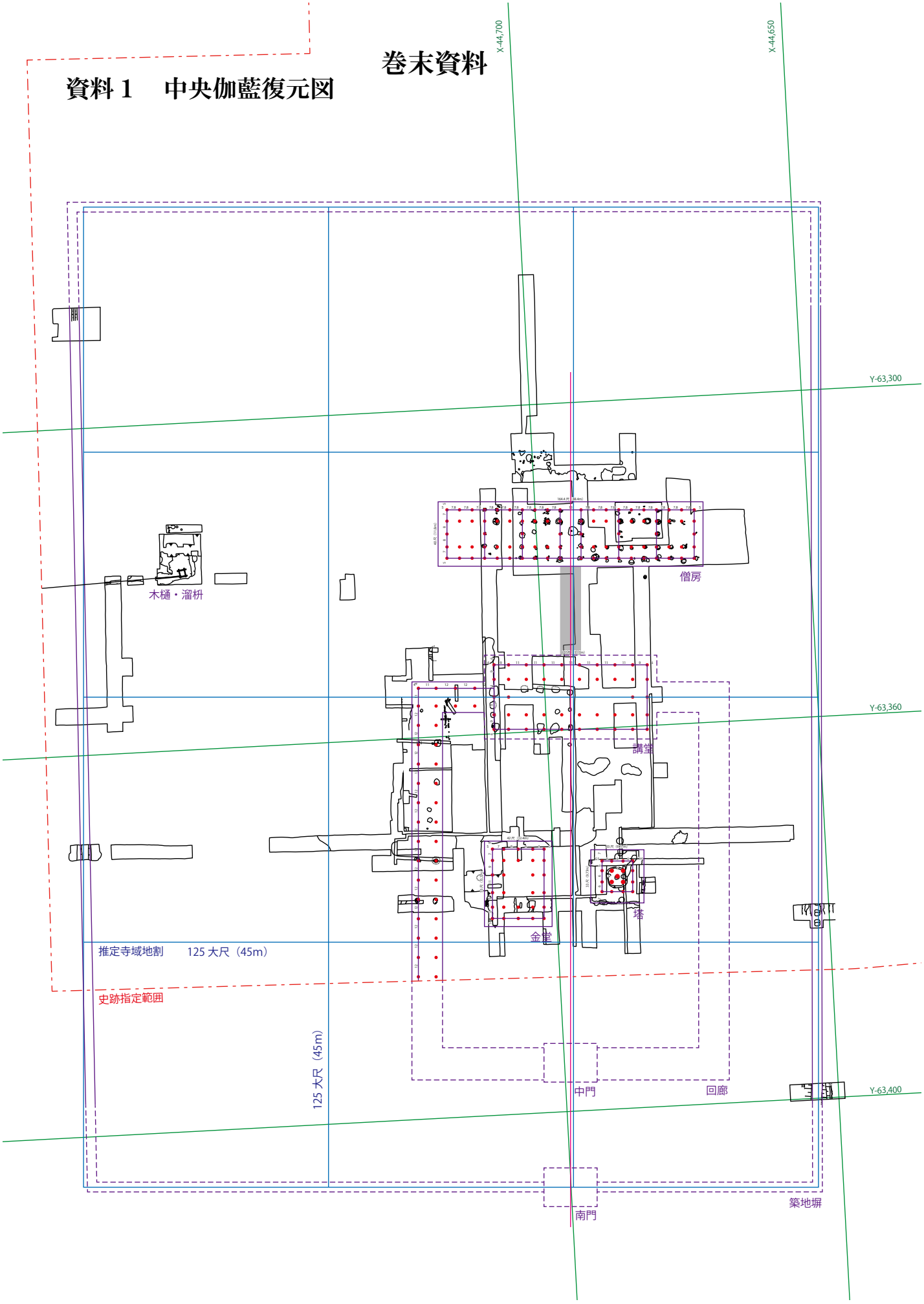
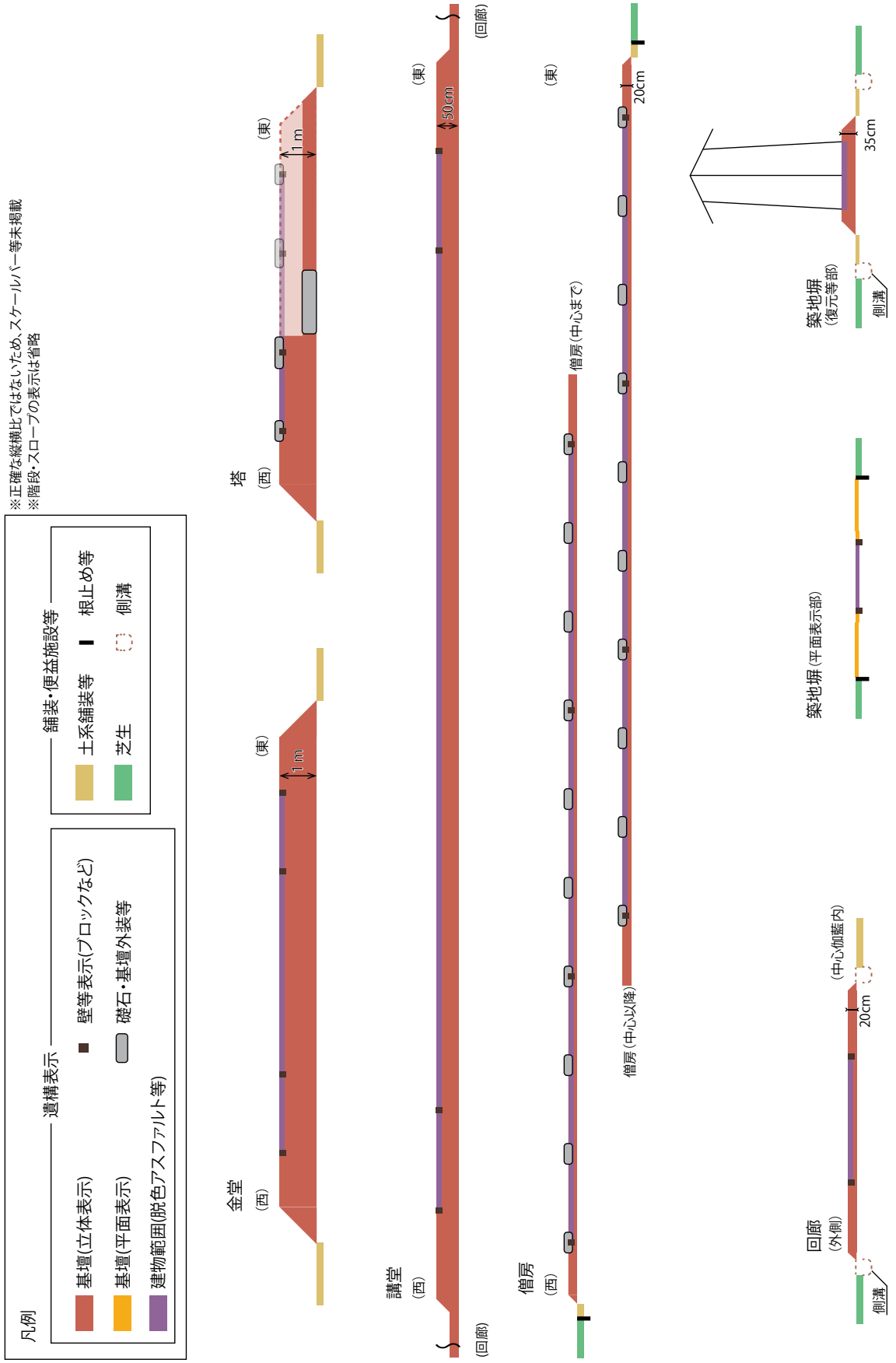
巻末資料

資料１　中央伽藍復元図



資料２　遺構整備断面イメージ図



資料３　各遺構の詳細規模（令和２年 12 月現在の検証結果）

【　塔　】・北辺を除く３辺の基壇化粧抜取り穴（溝）を検出
・**塔心礎は地下式**、基壇は地上に積んだもの。（不明を除くと地下式は 18%、古式）
・塔心礎・四天柱礎石は安山岩質（向山の三明寺石）。
・基壇外装は**乱石積基壇**と推定。（不明を除くと乱石積基壇は全体の 45%、瓦積基壇 27%）
・昭和 27 年調査の記録図（『倉吉市誌』）から**基壇高１m程度（約 3.5 尺）**と推定。
　＊以下、１尺は 29.6㎝とする。
・階段の痕跡はないが、基壇を回して造った後に付け足して作る可能性がある。
・階段は金堂側（西方）には必ずある。２方か４方に復元される。
・四天柱礎石の柱座が直径 0.8 ｍと大きい。**柱間６尺等間**が妥当か。
　＊塔の規模のわりに明瞭に柱座を作り出している礎石は珍しい。
・基壇の出は６尺以上が一般的であり、同規模の塔から 7.5 尺と推定される。
・**基壇規模一辺 33 尺（約 9.77㎡）**は小振り。**三重塔**に復元される。

参考文献：箱崎和久「古代寺院の塔遺構」『文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所 2012

【金　堂】・遺存した礎石・根石痕跡がなく、柱位置までは決めがたい。
・西辺は**乱石積基壇**ラインとして、東辺をどう決めるかの意味は大きい。
・東辺は残存した基壇土の検出状況と、仮に東西４間で、身舎９尺×２、廂７尺×２、軒の出５尺×２とした場合の計 **42 尺（約 12.4 m）**案がほぼ照合する。
・南北規模は塔の中軸線で折り返した長さ以上に基壇土が平面で検出され、**南北棟建物**であることは確定。調査者が南辺と判断した断面図の層位を再確認したが、下層縄文時代遺構の可能性もあり決め手を欠く。
・基壇土の平面検出範囲と、７世紀後半の金堂規模の類例（桁行／梁行、縦横比）を参考とする。その場合の桁行案は、身舎９尺・中央間 11 尺、廂７尺×２、軒の出５尺×２として計 **53 尺（約 15.7 m）**。
基壇規模の縦横比 1.26。

参考例	桁行×梁行	縦横比
法起寺金堂	16.1 × 12.7 m	1.27
高麗寺金堂	16.0 × 13.4 m	1.19
夏見廃寺金堂	14.4 × 11.8 m	1.22
北野廃寺金堂	15.3 × 13.2 m	1.15
備後寺町廃寺金堂	15.74 × 13.4 m	1.17
賞田廃寺金堂	15.5 × 13.5 m	1.14

参考文献：箱崎和久「日本における７世紀の寺院金堂跡とその問題」『東アジア古代寺址比較研究（Ⅱ）』奈良文化財研究所・国立扶余文化財研究所 2015

・一般的に金堂基壇高は塔基壇より高い。斎尾廃寺の金堂と塔の高さに差がないことに倣って**基壇高約１m**と推定。
・階段・金堂前面の燈籠に関する遺構なし。
・階段は塔側に１カ所、東西２方向に推定される。

【塔】・【金堂】・塔と金堂が対面する**「観世音寺式」伽藍配置**。
・復元案の塔西辺－金堂東辺間距離は約 24 尺（7.1 ｍ）、僧房馬道幅はおおよそ半分の 13 尺。
・塔・金堂中心間距離は 61.5 尺（18.2 ｍ）

【僧　房】・柱間寸法の桁行中央３間を狭くしないで２棟とも等間に復元する。
・礎石は**花崗岩の自然石**、柱座なし。
・１棟の**桁行９間7.8尺等間**で計**70.2尺（約20.8ｍ）**。梁行４間身舎８尺×２、廂７尺×２で計**30尺（約8.9ｍ）**。**南北両面廂**の建物。**馬道13尺**。**１棟３房**。
・南辺の基壇土検出ラインから軒の出は５尺と推定。
・２棟の基壇規模は東西５尺×２、70.2尺×２、13尺の計**163.4尺（約48.4ｍ）**。南北は５尺×２、30尺の計**40尺（約11.8ｍ）**。
・基壇高は僧房外北側の瓦面の高さから0.6ｍと推定していたが、元地形が北に下がっており、南辺は約20㎝程度と推定。
・基壇に上がる階段は馬道の南北位置に２カ所。
＊地方寺院で僧房がわかっている例は少ない。

【築地塀】・瓦出土量から瓦葺。
・築地塀の「版築」が検出されていないので、検出したのは**基壇状部分で幅約８尺**（約2.4ｍ）。
・東築地塀の東側（外側）、雨落溝際に**基壇縁石**がある。掘立塀軸線より縁石まで約2.4ｍ。
・**基底部幅**８尺は大きすぎ、夏見廃寺**６尺（約1.8ｍ）**と同程度と推定される。
・雨落溝心々で約5.0ｍ（17尺）
・塀中心から2.5ｍの雨落溝まで軒が出ることはないので、**犬走**に軒先がくるものと考える。
・**塀高さ**は『延喜式』の規定から、基底部幅６尺の２～2.4倍（約3.6～4.3ｍ）、**約４ｍ**。
・復元にあたり積雪・霜柱のことを考えると、崩れ防止のため土にセメント・にがりを足す方策が必要。
・基礎コンクリートを入れる必要があるが、遺構の深度から可能。
・版築の体験コーナーには屋根をかける必要があるのではないか。
・寄柱を検出してはいないが、区間1.8ｍは短すぎる。版築作業の効率からスペースが必要であり８～10尺程度。
・東西築地塀の心々距離約135ｍ。

【回　廊】・礎石なし。根石とその痕跡を南側で３カ所、北側で２カ所の計５カ所検出。
・**桁行12尺**（約3.6ｍ）、**梁行11尺**（約3.3ｍ）に復元
・西回廊も築地塀と同様、雨落溝まで軒が達するようには復元しない。**軒の出は４尺程度**。雨落溝は排水路と考えられる。
・北回廊の雨落溝を講堂北の排水路と仮定し、講堂の取り付け部を南へ下げると、講堂の中軸線に取り付く回廊に復元できる。
・西回廊で検出された「石列・瓦敷」長さ４ｍを、回廊内側の排水のため回廊基壇を横断した北側へ走る暗渠と推定する。
・**基壇高は20～30㎝程度**と推定。
・東回廊を検出してはいないが、伽藍中軸線で折返して復元図とする。

【講　堂】・「根石・根石抜き取り穴」の３カ所の距離は約６ｍ（20尺）で、**身舎梁行柱間11尺、庇柱間９尺**、の側柱とした**７間四面廂**の建物で、**軒の出を６尺**で復元する。桁行身舎11尺×７、廂９尺×２、軒の出６尺×２とした場合の計**107尺（約31.7ｍ）**、梁行身舎11尺×７、廂９尺×２、軒の出６尺×２とした場合の計**52尺（約15.4ｍ）**に復元される。
・**基壇高**は金堂の１／２、**50㎝程度**。回廊よりは高いものとする。